

音楽の創造行為における試行錯誤の理論化の試み (2) —現象学視点による創造行為の外的な契機と内的な契機の定義—

Re-considering the concept of trial and error for creative music-making: Definition of external triggers and internal opportunities for creative acts based on phenomenological viewpoint

清 水 稔*

Minoru SHIMIZU*

要 旨

People continue to engage in creative endeavors because they are aware of the possibility that there is “something” superior to the current state of things. It has, as yet, exceeded conscious representation in externalized creative works. This “something” is what exists beyond immediate, tangible conscious perception; hence, there is neither “being” nor “nothing” but rather a generative tension producing the impetus to create. Thus, we only encounter its tangible reality when the intangible perception is reified. Doing so involves a creative process of trial and error. The paper aims to define such an encounter with internal, undefined phenomenological objects whose existence within consciousness triggers a creative action and/or process. To this end, we adopt the phenomenological point of view outlined in Kitaro Nishida and Bin Kimura's thesis.

キーワード：音楽教育，試行錯誤，哲学，欲望

1. はじめに

絶えず過ぎ去る時間の中で、様々な運動が相互の関係として途切れることなく持続し、〈今、今、今…〉と新しい「こと」が生じ続けている。その運動の中で、あたらしい「もの」が生まれていき、「ない」から「ある」へと変化した「こと」は、〈今、ここ〉から過去へと押し込まれて〈事実〉となっていく。人間のつくり出す運動は速く、環境への影響も大きい。世界のゆるやかな「つくりつられる」という相互作用の関係性の中で、世界に大きな変質をもたらしているのが人間である。反復される「もの」は、実体的な「もの」も、不可視な「もの」も、人間にとっては意味作用の対象として存在認識に関係してくる。

その反復される「もの」への意味作用は、主体の側から恣意的に作用する。そのため、それらは人々の欲望の中で繰り返し用いられることで、シニフィエは拡大していく。その絶えざる意識作用と意味作用の運動

の中に紛れ込む他者の欲望が、個々の認識における意味作用へと参与することによって、主体に生じる喜びは、社会の体系が持つ欲望や権力に巻き込まれることになるのである。

その因果の中で欲望を引き受け、欲望を満たすことで、欲求の充足を無意識に図っている以上、そこから抜け出すことは容易ではない。だからこそ、芸術における創造行為は、より純粋な「こと」として取り出して、体験することが必要である。言わば、日常の反復性によって手垢が付いた意味作用の塊から、より善い「こと」が見出されなければならないのである。それゆえ、芸術は、そのような気付きを与える「こと」や「もの」でなければならない。それは、「ある」も「ない」も認識されない、意味作用が取りこぼした「こと」を捉えた、新たな意味作用の契機となる行為である。そのとき音楽行為は、時間軸上の〈出会い〉を生じ続けながら、想像を創造する芸術として働き行くことになる。欲望から生じた幻想は、想像界に生起しな

*弘前大学教育学部音楽教育講座
Department of Music Education, Faculty of Education, Hirosaki University

がら、事後的に象徴界へと参入していくことで、新たな〈私〉を創造している。それは、創造し、創造される世界の持続の部分を負いながら、未来を選択し、選択されるものとしての〈事実〉となりゆく〈私〉である。そのとき選択される〈より善い〉は、個でありながら多であって、多でありながら個としての〈より善い〉であり、〈ヒト〉にとって、より善く生きる時間としての「こと」でなければならない。そのような人間の教育としての音楽教育を〈私たち〉は考えていく必要が在る。

〈私たち〉は、絶えず過ぎ去る時間軸上において、空間的な同時性の中で輻輳して生じている「こと」の連続によって存在している。試行錯誤の理論化の試み(1)では、それらの「こと」を「もの」として認識するための意識作用の働きにおいて、取り逃がしている「こと」が在ることを指摘した。外部空間では、時間軸上において「こと」が輻輳する中で、物質が有する反復性から「もの」が生じている。その認識も、意識作用による反復によって成立している。また、主体の内部空間においても外部の「もの」に触発されながら生じる「こと」が輻輳する中で、意識作用による反復によって「もの」が生じている。それらの意識作用による「もの」化が取りこぼした「こと」を〈何か〉と名付けるとき、「ある」も「ない」もない〈何か〉を見出すには試行錯誤をして〈出会い〉をつくるしかない。

状態から生じる〈実感〉した「こと」が、意味作用によって「これではない」「これだ」と内的な〈私〉が話しかけてくるとき、そこから、つくられた「もの」が、〈何か〉への答えとなって現前する。そして、「もの」としての反復性が与えられるからこそ、〈私〉は見ることで「自覚」できる。「もの」(作品)は、選択の結果であり、私と他者の出会いの足跡である。その自覚が実感をともなったとき、身体的な「こと」として過去に堆積され、次の選択の、意識作用における契機として内在することになる。主体の行為から空間的に離れた「もの」は時間軸上に「もの」として在り続け、それは他者の創造行為の外的な契機として存在することになる。

本論では、創造行為における「試行錯誤の理論化」をする上で用いる、外的な契機である〈出会い〉と内的な契機である主体の内部空間に生じる意識されない〈何か〉についての言葉の定義を行う。同時に、そのことを踏まえて、音楽科の創作活動における書法や体系の扱いについても触れる。

2. 内的な創造行為の契機—〈何か〉についての定義

時間軸上に「こと」が輻輳する中で、意識が捉えた「こと」が空間的に反復されることで「もの」として認識される。そのときに、意識作用が捉え損ねた「こと」には、主体に生じる「こと」として持続している以上、〈私〉の意識作用の外に在りながらも、時間軸上の主体における連続として何らかの一貫性を有している「こと」が在ると考えられる。その中に、意識作用や意味作用の契機として作用する「こと」が在ると考えられるのは、「もの」として認識するための「こと」の分節と反復が、思考という「もの」に先立って生じているからである。そこから意識の志向に作用する意識作用が捉え損ねた「こと」は、〈私〉を性質付ける「もの」として措定される。

その「もの」は、主体における〈私〉の「はじまり」から「おわり」までを〈私〉という「もの」として捉えるようなものである。その〈私〉による意味作用を逃れながらも主体の意識の志向性の契機に関わる「もの」は、主体の生の持続と共に在る「こと」の連続性から〈私〉の生における固有な「もの」である。そのような固有性を持ちながら、人間における共通に生じる「こと」という意味で一般性も有している。そのような性質から、反復性のある「もの」でありながら名付けることは出来ない。よって、ここでは〈何か〉として、仮に置くことにして、その機能的な性質の定義を試みる。

その〈何か〉は、主体の意識作用の契機となるものである。固有でありながら共時的に生じており、それを支えるのが意識作用における同時性の空間である。その空間は時間軸を伴う空間である。主体と他の主体が関係し、意識作用の原点としての自己と意識対象としての他者が、〈今〉を起点とする過去と未来という時間軸に生じる関係を伴う空間である。

そのような時間軸と空間の中で、その〈何か〉は、〈私〉を結節点とする関係性によって生じる絶え間ない運動から回帰的に生成され続ける。故に、途切れることのない〈私〉の連続性において生じる「こと」から、〈私〉だけではない〈あなた〉や〈誰か〉の関係性における連続性において生じる「もの」である。そのため、様々な運動エネルギーを内包しており、それらの欲求や、欲求の間に生じる欲望を誘発する契機として働く。ラカン(Jacques-Marie-Émile Lacan)が、欲望の支えとして導入した「対象a」¹という術語も、言語の体系だけでは説明できない象徴化不可能な部分

を表すものである(松本 pp.280-283)。精神分析の臨床においても、病態を理解する上で反復的な「こと」を見出して、何かで措定せざるを得なかったことは、意識作用が取りこぼしながらも主体に作用する「こと」の存在を示していると言える。また、行為のエネルギーという側面から捉えれば、その〈何か〉として措定される「こと」の存在は、ベルクソン(Henri-Louis Bergson)のエラン・ヴィタル(élan vital)とも重なる²。そして、木村は、このような意識作用の志向性と、そこから生じる行為の構造を、生命一般の原理とした。そのような働きを「主体性」であるとして、主体が主体であることの根拠とするのである。

そこで、そのような内的な契機として措定される〈何か〉を、哲学的な知見から考察することで、その性質を定立することを試みる。音楽行為は、時間軸上において、絶えず音との間に「つくりつくれる関係」によって〈私〉を生じさせる行為であることから、自己の存在における関係性が捉えやすいのだろう。木村は、音楽行為を例に次のように述べる。

音楽の演奏において、主体は自らの「外部」との音楽的現実と関わると同時に、自らの「内部」で自己の音楽活動の生命根拠とも関わり続けている(木村2005, p.34)。

木村は、「生命の根拠との関わりとしての主体」と「世界との関わりとしての主体」と、二つの主体概念の間で現象を捉えている(2005, p.28)。人間主体は、言語を有するがゆえに、思考を可能にし、主体自身をも〈私〉として存在を認識する。それが自律における論理的な判断を可能にしているが、一方で、意識作用と意識対象の相関関係は、常に二重の関係性によって生じる事態となる。

そのとき、生命根拠との関わりを木村は指摘する。木村は次のように述べる。

われわれは人間である前に、なによりもまず生物で

ある。生物である以上、われわれは生命一般の根拠とのつながりを絶えず維持し続けなくてはならない。しかしこの「生命一般の根拠」は、個々の生命体に宿った生命現象とは違って、対象的に捉えることができない。対照的な「もの」の次元で見るとかぎり、それは「無」としてしか見えてこない。われわれが主体として、あるいは自己として生きてゆくということは、この客観化不能な「生命一般の根拠」との関係そのものを生きてゆくということにほかならない。(木村2005, p.103)

主体が行動を選択するとき、木村が指摘をする「生命一般の根拠」とのつながりが在ることは、人間の現象を理解する上で、どうしても仮定せざるを得ないことを我々は了解しなければならない。フロイト(Sigmund Freud)が、人間の精神構造を分析する上で、生命現象から「死の欲動」と「生の欲動」を措定し³、ラカンが欲望の弁証法において、生物学的根源的欲求をbesoin(英:need)として定義し、ベルクソンが、生物全体の進化におけるエネルギーとしてエラン・ヴィタルが在ると措定したことは——それぞれの論理の是非は置いておき、論理の過程において措定せざるを得ない事態が生じるのは——生命の持続と関係する〈何か〉が生じているからに他ならない。

そして、人間は、その「生命一般の根拠」から意識作用の契機を引き受けながら、他の主体との関係から生じる契機も、内的な契機として意識作用の志向に働いていると考えられる。人間の歴史が社会の発展と共に在るように、集団を形成することによって生命の維持を図るのが人間である。木村は、「人間は、単に生物としての生命的環境とのあいだに関係を保ち続けているだけでなく、自分以外の他者たちとのあいだに对人関係を維持し続けなければ個人の生存を全うすることができない」(2005, p.110)と述べた上で、主体の内部空間における意識対象との関係を次のように述べる。

¹ 新宮はラカンの「対象a」を「他人の中に埋め込まれ、私にとって非人間的で疎遠で、鏡に映りそうで映らず、それでいて確実に私の一部で、私が私を人間だと規定するに際して、私が根拠としてそこにしがみついているようなもの」と説明する(新宮1995, p.88)。

² 時間が不可逆性の持続に本質を持ち、状態そのものが変化である中で、生命は「連続的に自らを創造しているのだ」として、自己解体していく物質の特性に反するエネルギーが生命には在ると仮定したのが、共通の生命の本源的な弾み(élan vital)である(ベルクソン2010, pp.119-120)。

³ フロイトは、「すべての生命体が〈内的な〉理由から死ぬ、すなわち無機的な状態に還帰するということが、例外のない法則として認められると仮定しよう」(1996, p.162)とした上で、「死の欲動」とそれに対抗する「生の欲動」という概念を用いて、その関係性を論じた。

一方に主体的自己があり、他方に「大文字の他者」があって、両者の関係が問題となるというのではない。私と「大文字の他者」とのあいだのノエシ的な関わりが、私の主体自己なのである。われわれが普通に「自己」と呼んでいるノエマの表象は、このノエシ的な「あいだ」が意識に写し出された代理者であるにすぎない（木村 2005, p.112）。

ここで、木村が用いている「大文字の他者」という用語は、ラカンが定立した用語である。主体は、生まれたときから〈既に語られることで体系化された世界〉へと参入することによって、無意識に、その体系との関係性から自我を鏡像的に生じさせている。その体系をラカンは、「大文字の他者」と名付けているのである。言わばラカンは、個としての他者ではなく、多としての他者を見ているのである。それらの体系は、どのような体系であっても言語を用いて説明される以上、言語体系へと集約されていく。だから、「大文字の他者」は主として言語活動を意味する。

人は、意識作用によって生じた「こと」が切り取られて、反復され「もの」として意識されることによって、「もの」から回帰的に〈私〉を認識する。その意識作用の志向には内的な契機が作用している。それが、「生命一般の根拠」と「大文字の他者」と言われる〈既に語られた世界〉である。それらの関係性は、次のようなモデルで示される。

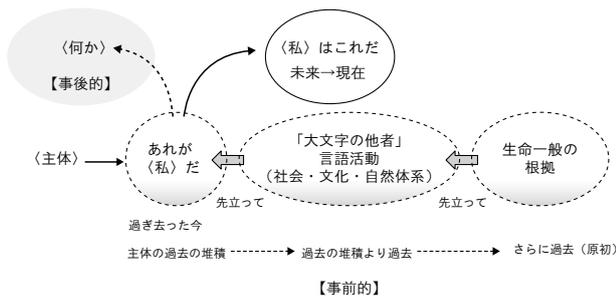


図1 意識が対象から〈私〉を分節する際の関係性

主体が事象との〈出会い〉から、意識対象に「あれが私だ」という自己を鏡像的に見るとき、既に在る体系によって分節される。それは、主体の意識作用の志向性が「大文字の他者」の作用を受けることを意味する。また、既に在る体系も、他者の欲望の結果として生じていることから、それに先立つ形で、主体は生命一般の根拠と関わり続けていると言える。それは、〈今、ここ〉の意識作用に先立って作用する意味で事

前的であるが、〈今、ここ〉の〈出会い〉においては過去なのであって、既に在る「もの」とへ遡及的に関わる関係である。一方、そのとき意識が取り損ねた「こと」が〈何か〉として事後的に生じていく。

そこから生じる「私はこれだ」という要求との関係から行為は生じる。そのとき、〈私〉の意識が取りこぼした「こと」から生じている〈満たされなさ〉が〈何か〉として、人間を次の行為へと駆り立てているのだと考えられる。それは、言葉の意味作用を伴えば「生きがい」や「幸福」といった事態として説明されることになる。

この内的な契機は、主体の内部空間において完結して生じるのではない。自律的な生命体は、一見すると主体の内部空間における思考によって算出された目的に向かって外部空間に働きかけているように見えるが、絶えず過ぎ去る時間軸上では、常に外部空間で働いている他者との関係において行為が生じるのである。だから、主体は〈私〉が〈私〉自身を限定しているのであって、どの瞬間においても、世界との〈出会い〉において生じていることから、世界そのものが主体であると言っても良いのである。

だから、世界の中で生き行く「もの」は、本質的にはどこまでいっても他律なのであって、その中で、内部に「もの」をつくる意識構造を持つ〈ヒト〉は、その未来可能性から選択している認識をするという点で自律として現象を捉えるのである。西田は〈ヒト〉も世界の一要素であることを次のように述べる。

個物は何処までも自己自身を限定するものでなければならぬ、働くものでなければならぬ。働くということは、何処までも他を否定し他を自己となそうとすることである、自己が世界となろうとすることである。然るにそれは逆に自己が自己自身を否定することである、自己が世界の一要素となることである。（西田 1989, p.15）

有機体が環境との〈出会い〉において、内的な契機は生じているのであるが、そこには時間的な差が生じる。この関係性から生じることは、認識が離れて見ることによって、常に一步遅れる。その一步は微分的な時間軸上の差異であって、運動が生じる空間としての間として捉えられる。西田は、常に認識において差異が生じる場所に存在が時間を伴って現象として現れることを次のように述べる。

のなくして働くということはない」(1989, p.16)と述べるのは、このような関係性を指し示した言葉なのだと解釈できる。

すなわち、先の図1で示したように、空間的な関係性として「生命一般の根拠」と社会的・文化的な「大文字の他者」と関わりながら生じる固有の〈何か〉が在る。そして、その上で、時間軸上の関係性から自己の存在認識を捉えたとき、常に〈追いつかないこと〉として〈何か〉が生じ続けている関係性が導かれる。別の言い方をすれば、〈今、ここ〉の〈出会い〉において生じる「こと」が在りながらも、絶えず過ぎ去ったところの差異から生じる〈私〉を、主体が〈私〉として引き受けなければならない矛盾でしか自己の存在認識が成立しないため、欲求を触発する〈何か〉が生じ続けているということである。

そのような背景から、人々は〈よりよい何か〉があるのではないかという幻想から立ち上がる「もの」をつくり続けているのだと言える。この〈よい〉は、一般的な表記としては「良い」であろう。しかし、個人の「良い」を越えて〈ヒト〉としての〈よりよい〉を「生命一般の根拠」と「大文字の他者」から志向されている事態が在るとすれば、〈ヒト〉という集合体も含む他者との関係における〈よい〉である。そうすると、倫理的志向も含めて「善い」と表記されるのが適切である。〈ヒト〉が「より善いこと」を行為の目的とすることは、アリストテレスが、いかなる実践や選択も何らかの「善」(アガト)を求めているとし、その「最高善」を「幸福」(エウダイモニア)にほかならなしたことも関係ないことではない⁴。すなわち、ここで用いる〈よりよい〉は、「生命一般の根拠」と「大文字の他者」を背景とする〈何か〉から生じると同時に、それ自体が目的となる〈ヒト〉という集合的主体が志向する「より善く」である。そのため道徳的な、倫理的な事柄も含むが、単純な善悪としての「善」でもない。善悪は状況において生じることもあるためである。

だからこそ、純粋とまではいかななくとも、純粋性を保った場における〈出会い〉に触れることが、未来の選択として生きていくことになる。そして、そのことが教育では必要である。少なくとも音楽においては、

言葉から離れたところの〈私〉に出会える場である以上、より善い生き方への試行錯誤として生じるべきであると考え。そうでなければ、次の芸術も、日常における小さな音の味わいから生じる幸福感もないだろう。

その試行錯誤において、概に在る体系から離れてみることも必要である。〈私たち〉の〈実感〉は、衣服におけるモード⁵という感覚によって示されるように、時間的にも空間的にも、社会や集団とは切り離せないところにある。しかし、既に在る体系という「もの」を用いるということは、手垢がついているように、他者の欲望が付随している。そのため、自己が自らの欲望を満たしたように錯覚をするが、その実は、他者の欲望を満たしているのである。そのことは、〈ヒト〉が、他者の「もの」を用いる中で助け合いながら自己の欲望を満たすことができる一方、そこに潜む他者によってつくられた権力の構造によって、個人の純粋な喜びの機会を奪われている可能性が在ることを意味している。

そこで、創造力を培うためには、手垢のないところでの創造体験が必要である。それが教育ではないだろうか。人間がつくり出した体系は「幸福」を求めた因果の中で生じたことの反復によって生じた「もの」の集積である。〈私たち〉は、その反復の中で現前する場や「もの」を日常として享受している。その中で、教育は単に反復であってはならない。教育によってより善い未来を得るためには、創造する上での視点を与える必要がある。過去の反復である製造ではなく、より善い未来に向けて、まだ無い〈何か〉を創造するには、人為的な綱目を掻き分けて主体に生じている純粋な〈何か〉に出会うための創造力を培う学びが必要である。

では、そのような創造力を培うためには、音楽の学びにおいて、どのような場をつくる必要があるだろうか。『哲学音楽論』において音楽行為と人の関係を哲学から捉えた今田は、西洋がロゴスによって、世界を捉えようとしてきた経緯があるため芸術もまた言葉で説明しようとしたところに失われたことがあるとする。今田は、次のように述べる。

⁴ アリストテレスは、『人間というものの善』とは、人間の卓越性に即しての、たまたしその卓越性が幾つかあるときは最も良き最も究極的な卓越性に即しての魂の活動であることとなる(1971, p.41)とした上で、「幸福こそは究極的・持続的な或るものであり、われわれの行うところのあらゆることからの目的であると見られる」(1971, p.38)と述べる。

⁵ 鷲田(2012)は、「他者の視線を〈鏡〉としてセルフ・イメージを調整しているわたしたち」は、その服が傷んでなくても、今年を着られないといった感覚が生じるとして、「機能性から遊離したところで決定する因子」をモードであるとしている(p.48)。

音楽を思考せず聴くことは、今、まさに生起している実際なので、その理由を歴史的、社会的、文化的背景に求めても、おそらくもうひとつの紙の世界を構築して終わることになる。

それならば、音楽がことばにより解釈される以前の原初、つまり音楽とことばが生まれた軌跡を探れば良いだけのことだ。(今田 2015, p.14)

すなわち、既存の音楽や語法を反復的に学ぶのではなく、音から音楽が生まれ出る瞬間を創造の学びとして体験するのである。そのためには、音との〈出会い〉から生じる〈何か〉を純粹な「こと」として創造行為に働かせる場の設定が必要である。そのような〈出会い〉の場とは、どのようなものであろうか。

3. 創造行為の外的な契機—〈出会い〉についての定義

これまで本論でも述べてきたように、意識作用の主体は、意識対象との関係において「こと」が同時に成立する中で、「大文字の他者」と「生命一般の根拠」を抱えながら認識対象を分節し、意味作用をする関係から欲望を生じている。世界の持続において主体は個でありながら全であり、全でありながら個である。それは空間的にも時間的にも関連しており、空間と時間軸における連鎖の結節点として〈私〉が絶えず生じるのである。

有元・岡部(2008)が、現代における日常の様々な文化事象を心理学の視点から分析し、主体を「社会的な文化的で歴史的、つまり集合的なものだと捉える」(p.20)としているように、あらゆる行為において〈私〉は、〈私たち〉や〈ヒト〉を内包している。

人は〈私〉という因果が取りこぼした「こと」に〈在るかもしれない満ち足りたこと〉との〈出会い〉を求めて「もの」をつくり続ける。そのためには「もの」が生まれる〈場〉が必要となる。その意識作用が機能する〈場〉における関係の中で、自己限定的に〈私〉が生成され、「私はこれだ」「私はこれではない」という試行錯誤によって「もの」がつくられる。それは、自らの〈出会い〉を自らつくることに他ならない。

〈出会い〉とは何であろうか。〈出会い〉は、身体的な「こと」を伴った意識作用が、その対象を捉えた瞬間だと言えるだろう。そこには、必然も偶然も同居している。九鬼周造は、「偶然はその本質の中に過去を欠いている」とし、「必然性は過去よりの存続を仮定

している」と述べるように(2016a, p.129)、偶然は主体の因果から離れたところの〈出会い〉であり、必然も主体の因果に基づく〈出会い〉である。そこからすると〈私〉の思考によって予期した「こと」は必然の〈出会い〉なのかと言えば、必ずしもそうではない。

思考という「もの」によって予期していた「こと」でも、実際に現実の「もの」として〈出会い〉を生じたときに、主体の内部空間では予期しない「こと」が同時性、共時性において、やはり生じる。それが〈実感〉と言われる事態であり、〈今、ここ〉でしか生じない出来事である。そのような〈今、ここ〉の関係性が継起的に持続することで、主体は持続しているのである。主体の意識と意識対象は、〈出会い〉を予期しながらも、〈実感〉を伴う現実の〈出会い〉は、常に邂逅の中で存在している。そのことは、何度も聴いた同じ録音の音楽でも、聴く度に感じる「こと」(あるいは実感)が異なる事実によって説明されるだろう。

また内部空間だけではない。外部空間においても、同時性や共時性によって世界は持続していることから、空間的に離れた、あるいは意識上から離れた「こと」が「もの」として現前することも含めて、主体は常に主体にとっての偶然性の中に存在している。九鬼は、現実世界を次のように述べる。

この我々の現実の世界が、単に一つの可能性に過ぎない、如何に偶発的なものであるかは、種々の可能性を、謂わば立体的に考えてみれば明瞭なことである。(九鬼 2016b, p.176)

そのような偶然の〈出会い〉の中に、自己の因果から離れた〈私〉の出現が在る。そこに「反復性」という因果から抜け出た創造の契機が在る。しかし、ここでの問題は、〈必然〉という「言葉」によって覆い隠された現実には在った偶然の〈出会い〉である。言葉の連鎖や統語的な持続に規定された因果には人は抗いにくい。繰り返される体系の中で生きる〈ヒト〉は、体系をルールとして捉える。その体系の中で行われる反復的な創作行為では、行為の途中で生じた偶然の〈誤り〉を新しい「もの」をつくり出す創造の契機とするが、〈誤り〉を「誤りで無い」と意味作用するには、他者の承認や、外部空間の他者の承認を超えた主体の内部空間での他者の承認が必要となる。すなわち「これで良いのだ」という内的な他者の声である。

そのような内的な他者を、創造行為は必要とする。そのためには、体系に拠らない創造の体験を通した

学びが必要である。そのような〈出会い〉を外部空間につくり出すには、「音楽」という体系から抜け出る〈場〉が必要である。音の世界そのものから創造行為を学ぶ「サウンド・エデュケーション」は、そのような〈場〉を提供する。今田は、音楽教育の在り方に対して次のような言葉で示唆を与える。

では、世界の事象のひとつとしての音楽ははたしてことばでできているのか。音楽を最初に聴いたとき、ヒトは〈音楽〉という概念を聴いているわけではない。なぜなら最初の体験をしたそのヒトは、まだことばを話さないかもしれないからだ。あるいは、話す語彙が限られているかもしれないからだ。では、その最初の聴取の肌理はどのように捉えるべきか。

最初の聴取の肌理をまた体験するためには、もう一度聴くことを繰り返すしかない。その再体験は再体験のようで、実は唯一無二の時間と空間に支えられているので、別の音の肌理が立ち現れ、その体験を再度体験しようとする、また違った時間と空間が立ち現れる。(今田 2015, pp.31-32)

弘前大学教育学部附属小学校では、「サウンド・エデュケーション」⁶に基づいた創作の実践研究を積み重ねており、「図形楽譜」を用いた創作活動を継続して実施している。同校教員の木村麻美教諭による小学校4年生を対象にした「図形楽譜から声の音楽をつくらう」という創作の授業では、環境音に基づく創造的な活動が行われた。それは、「サウンドウォーク」⁷を



写真1 授業で児童が作成した「図形楽譜」をもとに声のアンサンブルをつくる

行い、環境音を聴いて感じたことから「図形楽譜」を作成し、その「図形楽譜」をもとに「音楽づくり」をするというものである(写真1)。

児童たちは「図形楽譜」をもとに、感じたことを声で表現しようと〈試行錯誤〉し、強弱や音の重なり等を工夫することを意識しながら「音楽」を構成していく。「図形楽譜」を発想の〈きっかけ〉としながら、自由に読み取ることが可能であるように、音もまた、声を用いながら表現の制約のない中で〈音楽づくり〉が行われる。筆者は、各グループの創作の過程と発表を研究授業の日に参観した(2018年10月16日)。授業では、筆者が観察したときも、声を揺らしてみたり、非常に高い声で伸ばしてみたり、発音を変えてみたりと様々な声を用いた表現の試みがされていた。

サウンドウォークは人と音との関係を取り戻す活動である。自然が生み出す音は、主体にとって偶然の〈出会い〉となる。自然の体系がつくり出す音は、自己の因果に起因しない音を奏でる。そこに意識作用を志向したときに、主体は〈私〉そのものと出会う。それは意識が志向せざるを得なかった不意に生じた出来事であり、〈私〉に気付いたときには、「こと」は既に身体に大きな足跡を残しているのである。それは、やがて〈何か〉として〈私〉に見出されるのを待つ「こと」となる。

だが、その(二度とない時間軸上の〈私〉)に生じた「こと」を契機として「音楽」を創造する営みを学ぶためには、〈既に在る〉体系や「大文字の他者(既に語られた世界)」から抜け出す必要が在る。創作の際に用いる「もの」には、体系や「大文字の他者」といった文化的・歴史的な文脈が手垢のように付与されていることを踏まえなければならない。五線の記譜法もその一つである。

「図形楽譜」の役割は、この授業でも見られたように「再現」ではない。どのように読むかというルールづくりも含めて、音楽を根源的な部分からつくることを「図形楽譜」は創作する主体に問いかける。児童たちは、体系という〈技術〉に頼るのではなく、自ら体系をつくり出すのである。それは、子供たちが広場に集まったときに、自分たちでルールを決めて遊び出すようなものである。自分たちの〈技術〉に合うように

⁶ R. マリー・シェーファーによって創始されたサウンドスケープの概念をもとに、よりよい音環境のデザインを実践していくための教育。1992年に発表された『サウンド・エデュケーション』(鳥越けい子他訳,1992)では100の課題が紹介されている。

⁷ 「誰ともしゃべらず独りの空間を保ち、周囲の音すべてを聴きながら歩く」活動である。参加者はリーダーの後をついて行くが、リーダーが即興演奏のようにコースを決めることで、参加者は、「作曲した作品を体験するように、サウンドウォークを楽しむことができる」のである(今田 2015, p.125)。

ルールを決めて、その中で遊ぶ力を子供たちは既に身に付けている。「図形楽譜」は、そのような創作行為の主体に合わせる自由度が在る楽譜なのである。用いる体系を決めるのは主体の側に在るのだから、音楽教育の学習段階の初期に有効であるし、高度な〈技術〉を身に付けた集団であっても、その〈技術〉に合わせた「音楽」の世界をつくるのが可能な楽譜だと言える。

自由に体系を用いることができるとは言っても、〈自分たち〉のつくり出した「音楽」の世界が、「他者の承認」を得るかどうかが、「大文字の他者」や、その背景に在る生命一般の欲求を抱える主体にとっては重要な要素となる。すなわち内的な他者の承認である。それは、〈出会い〉において生じた「こと」が純粹に快として感じられたとき、「これで良いのだ」という声、あるいは声なき声として機能する他者である。

この題材の最初の段階で、児童たちはシェーファーが作曲した《ミニワンカー水の諸相一》を鑑賞している。その曲の「図形楽譜」を見ながら鑑賞することで、「図形楽譜」から生まれる音楽や、現代的な書法による音楽の響きを体験していたことが「大文字の他者」として機能し、「私はこれだ」という音の創出につながっていたのだと推察される。児童たちは、音階や拍節に規制されない音の体系を、「他者の承認」が得られる場として認識したのである。また参観したとき、教師の声掛けも〈試行錯誤〉を促す〈きっかけ〉として機能しているのを見て取れた。授業者である木村教諭は、「いろいろ試してみれば良いじゃない」、「一斉にやるか、順番にやるか決めて」と、様々な音の可能性を示唆することで〈試行錯誤〉の場における行為の幅を広げていた。教師は、児童たちの様子や、つくり出される音を聴きながら、そのときに必要な「音」との〈出会い〉を与えていた。それが創作の場での教師の役割あると考えられる。

また、試行錯誤の理論化の試み（1）で既に述べたように、仲間と共につくることが、創造の場において偶然の〈出会い〉をつくる。それは言い換えれば、他者の「こと」を〈私〉の「こと」として引き受ける事態である。他者（他の主体）の連続性の上に生じた「もの」が在ることで主体の〈出会い〉が成立しているとすれば、他者に生じた「こと」が過去に在ったからこそ、〈私〉の〈今、ここ〉の存在、そして未来の可能性が生じたことになる。そのとき、他者の「こと」は、〈私〉と因果関係を結ぶことになる。それは、

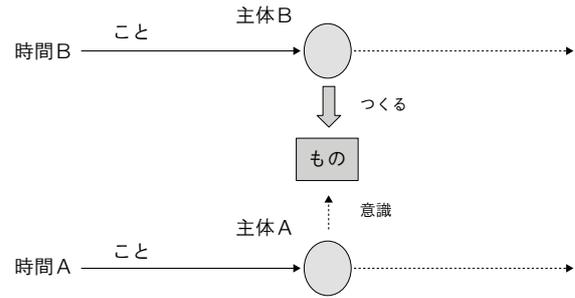


図3-A

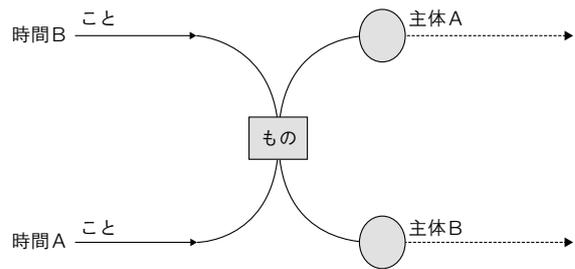


図3-B

次のようなモデルで説明される。

主体Aと主体Bと異なる空間で生じていた「こと」は（図3-A）、創造行為によって創出した「もの」を媒介として〈出会い〉が生じた以降、他者の時間軸上に生じた「こと」を因果として引き受けることになる（図3-B）。

つまり、常に未来を志向しながら〈今、ここ〉を互いに創造する中で、生を継続する〈私たち〉にとって、空間的にも時間的にも離れたところで生じた「こと」でも、いつか出会ったときに〈私〉の「こと」となる可能性を有している。それは、一度出会うと〈私〉の中で〈何か〉として内的な契機として機能する働きへと参加していくことになる。主体の意識作用の空間としての環世界を超えた「世界」の隅々で生じている「こと」は、〈ヒト〉も〈自然〉も分節は無く、すべては創造において無関係ではないのである。

そして、仲間との協働による創作は、「他者の承認」をその場で与えてくれる。一である〈私〉の「音」の選択が、多の〈ヒト〉の持続につながるためには、「他者の承認」が必要なのであって、〈音楽をつくること〉は、その後に対話と承認を求めることになる。そのような場を保証することも創作の場では必要である。

4. まとめ

仲間と〈出会い〉、つくる中で求めている「こと」

を知る。仲間の中での〈私〉に気付くことによってつくりたい「こと」が生じる。書法や音階といった制約のない〈場〉の中で、今、できることでつくることを楽しむ。できないことを求められるのではなく、ある中でできることを試していく、そこに、こんなことも出来るのだという発見が在る。すぐできてしまうことを教師は求めがちであるが、教師の安心は、子供の安心ではない。教師ができることは、「認めること」と「待つこと」である。そのことによって、既成の音楽ではない音楽の社会が形成されることが、創造力を育成していくのである。「これも良いのなら、あれもやってみよう」という思いが学習者に生じることが創造力には必要であって、そこに主体と主体が音楽をつくることを通して場を共有する価値が在る。

内的な契機としての〈何か〉は、「生命一般の根拠」と「大文字の他者」に基づいて生じながら捉えられないものゆえに、〈ヒト〉は〈出会い〉を求めて創造をする。時間軸上で意識が取りこぼす〈何か〉は、創造行為の絶えざる契機である。つくられた「もの」は、社会的な承認を必要とするが、既に在る体系を用いて承認をしようとする、体系は限定されたルールや〈技術〉を内包するため階層的な承認を生じてしまう。そのため、〈何か〉を見出していく手立てとしての創造行為を学ぶ場として、既存の体系や因果に拠らない偶然の〈出会い〉を生かした試行錯誤の場が求められるのである。

いずれは〈技術〉が身に付く中で、その〈技術〉に見合った世界をつくり出していくであろう。だから、五線も使えるならば使ってもよいだろう。しかし、そこには多くの権力が付随している。そのことは、音そのものから創造する体験があつて感じ取れるようになるはずである。〈ない〉状態を実感すれば、〈ある〉状態に気づくようになる。認識されなかった他者の手垢が見えてくるようになるのは、〈ない〉状態を見たから気付くのである。造形作家の岡崎（2007）が、『技術』とは出来事、行為における同一性の確保であり、

反復可能性である」（p.23）と述べているように技術自体に因果は存在する。技術自体を試行錯誤しながら、創造するところに技術自体の意味を見出すのである。それが原初的体験の学びである。

目的は「創造」の体験である。創造するということが、それ自体が〈技術〉として生徒に身に付くことが、個々の「幸福」に資する文化を創造することになると言える。それは文化という多の一としての〈私〉である。試行錯誤は技術であり、試行錯誤の技術は、〈何か〉に〈出会う〉ための「技術」なのである。

【引用文献】

- アリストテレス（1971）『ニコマコス倫理学（上）』高田三郎訳、岩波書店。
 有元典文・岡部大介（2008）『デザインド・リアリティー 集合的達成の心理学』北樹出版。
 今田匡彦（2015）『哲学音楽論—音楽教育とサウンドスケープ』恒星社厚生閣。
 岡崎乾二郎（2007）「芸術の設計 | 技術の条件としてのノテーション」『芸術の設計』フィルムアート社。
 木村敏（1982）『時間と自己』中央公論新社。
 木村敏（2005）『あいだ』筑摩書房。
 九鬼周造（2016）「哲学私見（1936）」『人間と実存』岩波書店。
 九鬼周造（2016）「驚きの情と偶然性（1939）」『人間と実存』岩波書店。
 シューファー、R. マリー（1992）『サウンド・エデュケーション』鳥越けい子他訳、春秋社。
 新宮一成（1995）『ラカンの精神分析』講談社。
 西田幾多郎（1989）「絶対矛盾的自己同一（1939）」『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』上田閑編、岩波書店。
 フロイト、ジークムント（1996）「快樂原則の彼岸（1920）」『S. フロイト自我論集』中山元訳、筑摩書房。
 ベルクソン、アンリ（2010）『創造的進化』筑摩書房。
 松本卓也（2015）『人はみな妄想する—ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社。
 鷺田清一（2012）『ひとはなぜ服を着るのか』筑摩書房。

(2019. 1.15 受理)